

第1回 「0」(ゼロ)の意味について

IT生

以下は、英国のテニスンによる詩(007「スカイフォール」から)である。
—多くのものは奪われたが、残されたものも多い
かつて地と天を行き来した力強さは今はないが、今も英雄的な心は残っている
弱くはなれども、戦い、見出し、屈することのない意志は強い—。

ここに、自然によるものにせよ、人為的なものにせよ、人間社会にもたらされる災害に対する際の姿勢が描かれている。

わが師、寺田寅彦先生も同じことを説いている。

— 人類が進歩するに従って愛国心も大和魂もやはり進化すべきではないかと思う。砲煙弾雨の中に生命を賭して敵の陣営に突撃するのもたしかに貴い日本魂(ヤマトだまし)であるが、〇国や△国よりも強い天然の強敵に対して平生から国民一致協力して適当な科学的対策を講ずるのもまた現代にふさわしい大和魂の進化の一相として期待して然るべきことではないかと思われる 一。(昭和9年)



毎年1月17日に行なわれる阪神大震災の慰霊祭。20年たっても喪失感はぬぐえない。

寺田先生の御説のように、現代にいたっても、人々の関心が災害後の対応に偏りがちな所は変わってはいない。阪神大震災以降の様子をみていると、災害前の対策が、被災後の様相に大きく影響するという自明の理が、いつまでも分からないようなのだ。被災して、「ゼロからの再出発」などという言葉が必ず出てくるが、現実には「マイナスからの出発」で、いつまでもゼロにすら戻らないのが被災地の常なのだ。

1 マイナス 1 だとゼロからの再出発になるが、0 マイナス 1 だと、マイナスからの再出発にしかない。災害前に、たとえ 1 でも、対策を積み上げておくと、被災後のマイナス分が小さくなる。特に、人命のマイナスを避ける対策が事前になされていると、被災後の復旧、復興のスタートの早さに関わってくる。例えば、ガレキの中に犠牲者がいる場合と、いない場合を考えると理解しやすいだろう。これがどうも世間の多くの人には思いが至らないらしい、ということで、寺田寅彦先生はお嘆きなのである。

本欄では、なぜ日本人は災害以前に対策をとろうとしないのか、について考えてみることにする。

(平成 27 年 4 月)